

令和元年6月24日現在

機関番号：17701

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2015～2018

課題番号：15K15915

研究課題名（和文）小規模離島における地域の風土を活かした発達障がい児療育支援体制の構築

研究課題名（英文）Relationship between Mother's Acceptance of Children Developmental Disorders and Regional Climate in Remote Island

研究代表者

稲留 直子（Inadome, Naoko）

鹿児島大学・医歯学域医学系・助教

研究者番号：60709541

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,600,000円

研究成果の概要（和文）：親の子供の障害の受け入れプロセスは「児の行動特性への気づき」「発達障害の可能性への疑い・気づき」および「受容」の3段階に分けられた。また受容過程に関わる「島の物理・社会文化的環境」「配偶者との関わり」「祖父母の関わり」「専門職との関わり」がそれぞれの段階に影響を与えた主要因として特定された。島の開放的な心理的環境は、居住者との密接な関係を通して「児の行動特性への気づき」を促進したが、一方でそれは「障害」を異質なものと捉え「発達障害の可能性への疑い・気づき」を抑制した。このような環境で、島の医療従事者は親の不安感軽減を優先した支援は安心を与える一方で、気づきを遅らせる可能性を示唆していた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、離島で発達障害児を育てる親が体験した育児経験の詳細な語りから、「子どもの受け入れ」に影響を与える地域風土について明らかにすることを試み、母親の「子どもの受け入れ」がどのように離島の地域風土に影響されているかについて検討し、共通の要因が抽出された。離島の遠隔性・親密性・凝集性の高さ、島民が持つ発達障害の概念や児童発達支援の考え方にも影響を与えていることが明らかになったことには意義があると言える。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to clarify relationship between mother's acceptance of the disorders of their children with developmental disorders and regional climate in remote island where they live. Participants were three mothers of four children with developmental disorders who lived in remote island and semi-structural interviews were conducted with them. In case mothers with children with developmental disorders were organized "feelings for parenting" feeling of children and their awareness of growth and "recognition of relationships with others", it thought to strongly influenced by the regional climate, so we considered the relationship with the regional culture.

The regional culture as the physical environment of the island had a strong influence in the process that mother acknowledges and accept acceptance of child's raising.

研究分野：地域看護

キーワード：発達障害児 育てにくさ 離島 地域風土 母親

様式 C-19, F-19-1, Z-19, CK-19 (共通)

## 1. 研究開始当初の背景

発達障害児支援は、平成17年4月施行の「発達障害者支援法」に基づき、医療・福祉・教育など多岐にわたる分野でライフステージに応じた実践及び研究がなされている。特に乳幼児期は、「早期発見・早期療育」につながり適切な支援を受けることが児の成長を促すとされ、本児だけでなくその家族を対象に支援が行われており、「障害の気づき」の促しや障害受容の促進、専門機関へのつながりが母子保健事業を通して本児と関わる支援者の重要な役割である。また、支援を必要とする児が効果的な療育へつながるには発達障害を診断できる専門医師や、療育指導が行える専門機関が必要であるが、日本は、多くの島嶼とへき地を抱えており、専門機関は都市部へ集中しているため地域差が大きい。特に離島は社会資源へのアクセシビリティが低いことから、適切な支援の時期を逃すこともある。

一方で、発達障害児の養育者の「障害受容を促進する要因」は、近親者の障害に対する理解や、専門家ではない身近な相談相手への相談頻度といった、インフォーマルなサポートであることも明らかになっている。日本では少子化、核家族化が進み、地域コミュニティの関係性は希薄化しているが、離島はその地域特性から、地域・家族間の凝集性が比較的高く、自助・互助の地域力があり、こどもは一定の小集団の中で家族以外の人々とも関わりながら、無意識のうちに社会性を身につけることができる風土を持っている。

著者が経験した保健師の実践の中で、このような地域の風土は、発達障害児の健やかな成長に不可欠な「養育者の障害の受容」の促進要因になり、社会資源へのアクセシビリティの低さを補う関係にあるのではないかと考えた。また、離島における発達障害児を持つ両親の障害受容と地域の風土との関係性を明らかにし、乳幼児期に本児家族に関わる保健師が意図的に活用することで、障害受容を促すことができると考えられる。

発達障害児支援に関する研究は、医学、教育学、心理学などの分野で行われているが、看護職の視点で研究されているものは非常に少ない。また、本児の発育や、養育者のストレス、障害受容のプロセスを明らかにした研究はあるが、障害受容を促進する地域の風土との関係性について述べられたものはない。発達障害児を支援する専門的機関が偏在化している日本において、その支援のあり方は、地域特性を十分に踏まえたシステムであることが必要である。そのため、社会資源の乏しい離島における発達障害児を持つ家族の障害受容と地域の風土との関係性を明らかにし、地域の看護職が結果を意図的に活用することで、離島以外の社会資源へのアクセシビリティが低い僻地に応用できる可能性があるだけでなく、都市部においても、専門的支援に増幅効果をもたらすことができると考えられる。

## 2. 研究の目的

本研究では、孤立型離島で児童発達支援事業（以下、事業所）に通う未就学児の親を対象に、母親が時の育てにくさを認め受け入れる過程に影響を与えた「子育てに対する思い」「子どもの特徴と成長への気づき」「他者との関りの受けとめ」を明らかにし、地域風土との関連を検討することを目的とする。

## 3. 研究の方法

### (1) 研究対象地域の選定

孤立型離島3島の訪れ、現地で「風土」に関連する文献・資料などを収集し、「地域の風土」について整理・分析した。その3島のうち、行政保健師、発達支援事業の保育士と連携が深まったX島において調査を行った。調査対象地域は、発達障害者支援事業は島内で実施されているが、発達障害者支援センターなどの高度な専門機関や常設の小児発達外来が島内に存在しない孤立大型離島であるX島とした。また、X島は1島1町であり、島内のサービスが均質であることも選定理由の一つである。

## (2) 調査研究

### ①研究1：グループインタビュー

#### i 調査方法

X 島において、X 島保健師または事業所の保育士を通して紹介された、事業所に通所している来就学児の親を対象とした。事業所保育士をとして、グループインタビュー参加を書面で案内し、同意が得られた6名と日程調整した。インタビューは、インタビュアー1名による半構成的方法を用いた。構成内容は〈子育ての状況〉〈子育て環境〉〈子育てに対する思い〉について自由に話していただいた。話し合った内容は、許可を得てICレコーダーに録音し、逐語録を作成した。

#### ii 分析方法

作成した逐語録を意味内容ごとに切片化しデータ化を行った。

### ②研究2：個別インタビュー

#### i 調査方法

研究1に協力を得た6名に対し、個別インタビューの協力依頼を行った。6名のうち、研究協力を申し出た母親3名に対して研究者が個別に文書を用いて研究の趣旨の説明を行い、文書による同意が得られた全員を対象とした。インタビュー内容は、妊娠出産時から現在までの育児経過に沿って以下の3点について聞き取りを行った。

- a. 障害に気づいたきっかけ：家族や近隣住民との関わり、保健師などの専門職等の助言、メディア等から自分で学んだ等
- b. 障害を受容したきっかけ：家族や近隣住民との関わり、保健師などの専門職等の助言、メディア等から自分で学んだ等
- c. 児の健やかな成長を促した関わり：家族・近隣住民との関わり、専門機関の支援等  
また、インタビュー内容は許可を得てICレコーダーに録音し、逐語録を作成した。

#### ii 分析方法

上記のaとbの調査内容を、個々の家族成員ごとに質的帰納的に分析し、〈発達障がい児またはその疑い児を持つ家族の障がいの気づき・受容〉と〈小規模離島の地域の風土〉との関係について、続柄や年代による相違と共通点を抽出し、上記のcの調査内容を質的機能的に分析し、〈児の成長を促した関わり〉と〈小規模離島の地域の風土〉との関係を明らかにした。

## 4. 研究成果

研究1、研究2の分析により、2つの視点から見た「地域風土」と育児経験について示唆が得られた。

### (1) 離島の物理的環境としての地域風土と育児経験

離島は、もともとその土地に生まれ、暮らしている人びとだけでなく、さまざまな理由で離島での生活を望み、移り住む人たちが多くいる。「子育てする場所」として離島を選んだ家族にとって、離島特有の自然の雄大さや人口・交通の特徴は子どもにとっての利点となり、親の安心した子育てにつながると考えられる。また、島外での生活経験がある場合、児の行動特徴がほかの地域では受け入れられないであろうという思いから、他者への影響を気にする必要のない離島の物理的環境が、子育ての助けになっていると考えられる。

地域における障害児支援の軸は児童発達支援である。児童発達支援は「療育」とは異なり“気になる”段階の子どもから幅広く対象とすること、さらには家族支援や地域支援も含む概念である点、を踏まえておく必要がある（障害児支援のあり方に関する検討会 2014）。しかし、児童発達支援の拠点施設である地域療育センター等の整備は都市部を中心に、人口や財政基盤の大きな自治体でモデル的に進められてきた。既に構築されてきた障害児の地域支援体制も地域格差が大きい、資源の希少性がある離島地域の発達障害児を持つ親の思いに着目した研究はない。今回、母親の「子育てに対する思い」と地域風土の関係を紐解くことで、「離島」の豊かな自然や、都市部と比較して人口や車の往来が少ないという物理的環境は、母親が子供の行動の特徴を「その子らしい姿」として捉え、前向きな子育てに良い影響を与えており、自の受け入れを促進させることが示唆された。

### (2) 離島の社会文化的環境としての地域風土と育児経験

島は資源の希少性が高い。特に、島外の生活を体験した親にとっては、資源が少ないことで自身の子育て観に即した資源の選択ができず、子育ての満足度を下げる可能性もある。しかし資源や人口の少なさは、比較的小さなコミュニティの中で、顔見知りの他者と長期的なつながりを持ちながら社会生活を営むことを可能にするという利点であるとも考えられる。この環境は、発達障害児の特性やその子の得意・不得意、対処方法を周りの大人が理解し実践しやすく、年中行事などを通じて児が成功体験を積める場の設定もできる大変優れたコミュニティであると言える。本研究においても、資源の希少性や、匿名性のなさに戸惑いを感じながらも、それが他者と親密になるための敷居を低くしている事も実感している。発達障害児を持つ親の受容の支えはソーシャルサポートであり、家族や仲間など身近な人が比較的助けになったと認知されており、「療育や訓練などを行う施設」や「医療機関」といった専門機関はそれらと比較する

と低い値になっていた（石本・太井 2008）。しかし、本研究においては、母親は対象児数が少ないことで専門職を身近に感じ相談しやすい相手と認識しており、また専門職にとっても、少人数だからこそ本児の特性に合った個別性の高い関わりが可能となり、そのことは母親が児の成長を実感できる事にもつながっている。

つまり、発達障害児の母親が子育てにおいてネガティブ・ポジティブな感情を持っている時、離島における狭小性や島の人びとの親密性は、母親の子育てに対する満足感や安心感を高め、児の行動特性や成長の気づきを促しており、発達障害児の親が児の育てにくさを認め受け止めていく過程には、離島特有の匿名性のなさや親密性の高さが強く影響を与えていると思われる。

一方で、親密性の高さから島内の専門職からは障害の可能性を明確に伝えにくい側面があるように思われる。島内専門職からは得られなかった具体的な指摘を島外から派遣される専門職から受けることで、児の特性を認め育てにくさに納得していた。自分自身が発達障害の可能性を感じていた場合、一度は落胆するものの、島外専門職から学んだ対処方法を実践することで児の成長の実感につながっていた。狭小性の高い離島における専門職との親密性の高さは、告知を困難にする可能性があることから、島外専門職の活用が重要となると思われる。

親は、自身の成育歴や経験を通じた「子ども観」や、希望する子育て環境や理想的な子どもへの接し方など、それぞれの「子育て観」といった価値観を持っている。子育てにおいて、家族間の価値観の相違は、母親の育児行動実践に大きく影響を与えられ、祖父母の障害受容は母親の障害受容に影響を与えていた。

離島では、1年を通して集落行事などが執り行われ、地域住民は行事参加を通して顔見知りになり、地域の子ともは小さなコミュニティの中で大人や子ども同士の関わりを通して社会性を身につけ文化を継承していく。離島の住民は、その隔絶性や資源の稀少性から労働や子育てにおいて互いに助け合いながら生きてきた。X島は、地形的特徴から集落の堺が河川であることが多く、島外ばかりではなく島内の交通も楽ではなかったことから、集落単位で文化が異なり、集落内の住民同士のつながりが強い。このような地理的背景から集落を「1つの単位」とする感覚が根づいており、子どもも「集落の子ども」として接しているため、集落行事等の場では他児とわけ隔てなく扱われていたと考えられる。一方本研究では離島で生まれ育った祖父母の障害児に対するネガティブな感情も母親の育てにくさを認める過程に影響を与えることが示唆された。

#### 【引用文献】

1) 石本雄真・太井裕子 障害児を持つ母親の障害受容に関連する要因の検討 母親からの認知、母親の経験を中心として 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要 1 (2)29-35. 2018

#### 5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 1 件)

稲留直子・丸谷美紀 離島における発達障害児を持つ母親の子どもの受け入れと地域風土との関連 島嶼研究 査読あり 第19巻1号, 1-14, 2018

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究分担者

研究分担者氏名：丸谷 美紀

ローマ字氏名：MARUTANI MIKI

所属研究機関名： 国立保健医療科学院

部局名：その他部局等

職名：統括研究官

研究者番号 (8桁)：50442075

研究分担者氏名：森 隆子

ローマ字氏名：MORI RYUKO

所属研究機関名：鹿児島大学

部局名：医歯学域医学系

職名：助教

研究者番号 (8桁)：50507126

研究分担者氏名：兒玉 慎平

ローマ字氏名：KODAMA SHIMEI

所属研究機関名：鹿児島大学

部局名：医歯学域医学系

職名：講師

研究者番号（8桁）：80363612

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。